

今回の研究会のテーマは「カメラ名またはメーカー名が“A”で始まるカメラ」であるため、研究会報告ではメーカー名とカメラ名がともに“A”ではじまるAltissa社のAltixを取り上げることとした。私がたまたま現在、このカメラのほとんど全機種を所有しているからでもある。

アルティックスは第二次世界大戦の直前にドイツのドレスデンで呱呱の声を立てていたが、大戦の勃発で製造が中断され、戦後になっていち早く復興されたあとは、形式を新しくしながら順調に生産を伸ばしていったというごく普通の、中級の35mmノン・レンジファインダー機である。その製造の最盛時には年間20万台も生産され、アメリカへも大量に輸出されたというから、欧米におけるこのクラスのカメラのうちでもっとも普及したカメラのひとつに数えられてよいであろう。しかし、会社が東ドイツにあったため、国営化の波に呑み込まれ、アルティッサ社自体が消滅の憂き目に遭う。そのため、我が国などではまったくと言ってよいほど知られざる存在でしかなかったかと思われる。実際、はっきり言って質的には後世に名を残すようなカメラではなかったが、第二次大戦後の世界的なカメラの普及、大衆化の流れの中でそれなりの存在意義を示したカメラとして一応、記憶にとどめられてもよい存在であろうかと思われるので、この機会に紹介をさせていただくことにした。

### アルティッサ社の沿革

アルティックスを作ったのはアルティッサ社であるが、この会社はまず、1927年ころに Emil Hofert (エミール・ホファート) という人がボックスカメラの製造をはじめたことに端を発するという。彼の名前の頭文字の“E”と“HO”から造語した名前の“Eho”カメラ会社は1931年からエホー・ボックスカメラの製造をはじめたという。ちょうどそのころ Berthold Altmann

(ベルトホルト・アルトマン) が会社に入ってきて、そこで自分の名前を使ったアルティッサ・ボックスを出し、次いでエミール・ホファートの後を継いで、1935年には会社名も自分の名前そのままのベルトホルト・アルトマン社に変えている。そして、1937年には二眼レフのアルティフレックスを出し、1939年3月にはついに35mmカメラのアルティックスを出すことに成功する。これがこのあとに続くアルティックスの各型の始まりである。それから1年も経たぬうちに第二次世界大戦が勃発しているが、カメラの製造は続けていたようで、41年には会社名をアルティッサ・カメラヴェルケ・ベルトホルト・アルトマンに改称している。大戦中に連合軍のドレスデン大空襲で工場は壊滅的打撃を受ける。しかし、1945年の終戦後はいち早く復興に成功し、47年にはカメラの生産を再開するとともに、すぐにアルティックスもⅡ型になる。その後、Ⅲ型、Ⅳ型と改良が続けられ、54年のⅤ型でこのシリーズの頂点を迎える。年間20万台の生産量を誇ったのはこのころのようである。さらに、これに続いて55年には新シリーズのアルティックス-nおよび-nbへと発展するが、ちょうどこのとき会社自体が国営化の波に洗われ、ついに1958年1月にVEBカメラ&キノヴェルケに統合されてアルティッサの名は消滅してしまったのである。その後、1961年に旧ユーゴスラヴィアのサラエヴォでアルティックスⅣ型のライセンス生産が行われ、アルティックス -nと -nbはなんと1970年ころまでつくられていたというエピソードは残されたものの、約20年続いたアルティックスの歴史は正式には1958年で閉じられたことになる。

### アルティックスの各型

アルティックスは上に述べたように、少しずつ進化をしながら、約20年間にわたって作り続けられたが、その間の形式上の変化はアルティックスⅠ型からⅤ型までの流れとそれに続くアルティックス-n型および-nb型の流れに2大別できる。また、各型は製造時期の前後によって前期型と後期型に分けることのできるものが多い。

そこで、それら各型の特徴と変更点を具体的にカメラの姿写真を添えて、以下に解説してみたい。

### Altix I (前期型) 1939年 (写真1)

初代のアルティックスで、戦前型とも呼ばれる。焦点距離35mmのレンズと24×24mmのロボット判のフォーマットを採用して、35mmカメラのなかでもコンパクトにつくことに成功している。NとFの2点フォーカスとし、小さな逆ガリレオ式ファインダーにT字型のボディレリーズカバーと八角形のレンズ前板が独特の印象を醸し出している。135フィルムの巻き上げ、巻戻しはノブ式の普通のもので、スプロケットはひとつのもっとも簡単な仕組みが使われ、二重露出防止装置付きとなっている。レンズにはLaak Pololyt 3.5/3.5cmを付け、発売当時の価格がDM43.—ということはElmar 3.5付きライカⅢの7~8分の1にしかならず、当初から普及型を狙ったカメラであったことが窺える。カメラ名の“ALTIX”をボディレリーズカバーの上に縦に刻印しているところがユニークである。

### Altix I (後期型) (写真2)

レンズ前板がその後に続く横長タイプに代えられているところから本機を後期型としたが、レンズにSteinheil Cassar 2.9/3.5cm、シャッターにはコンパーラビッドを付けているので高級タイプを目論んだヴァリエーションなのかもしれない。戦前のものか戦後に作られたものかは不明。その他は前期型とまったく同様である。

### Altix I のバック (写真3)

Altix I は底蓋をはずすことで写真にみるようにフィルム圧板部が上にヒンジで開く方式をとっていて、フィルムの装填がバルナック・ライカよりはるかに容易である。ライカM3の10年以上前にこの方式を採用していたことは驚きである。24×24mmの正方形フォーマットであることがわかる。

### Altix II 1948年 (写真4)

シャッターのボディレリーズボタンの位置をボディ上部中央に移動して使いやすくした。これでこのボディタイプの基本形が定まった。レンズはNovonar 3.5/3.5cm、シャッターに1~1/200秒のCludorを採用。シンクロ接点付き。巻き上げ、巻戻しノブに前期型(2本溝)と後期型(3本溝)があるが、本機は前期型。レンズ前板上部に扇形囲みゴシック体文字でALTIXと刻印。



写真1 Altix I (前期型) 1939年



写真2 Altix I (後期型)



写真3  
Altix I のバック



写真4 Altix II 1948年



写真5 Altix III 1949年



写真6 Altix IIIa 1952年



写真7 Altix IIIaのバック



写真8 Altix IV (前期型)1952年



写真9 Altix IV (後期型)

Classic 35 (写真10)

Altix IV後期型の同型異名機。レンズ前板上部にClassic 35の刻印。対米輸出用とされる。フィルムインジケーターはない。

Altix V 1954年 (写真11)

IV型と同様に、ボディエプロン上部のカメラ名が四角形囲みゴシック体の前期型と筆記体で囲みなしの後期型とがある。Altix IVとの相違点はレンズがスピゴット・マウント(ブリーチロック・バヨネット・マウントとも呼ばれ、プラクチナやヴェラにも使われた)による交換可能機となり、シャッターにセルフタイマーが付いたことである。完全なビハインド・ザ・レンズ方式のTemporまたはProntor SVSシャッターが使われている。標準レンズはIV型と同じ構成。交換レンズには望遠レンズ:Telefagor 3.5/90mm、広角レンズ:Primagon 3.5/35mmのほか、この写真に示したLydith 3.5/30mmが用意された。セルフタイマー・スタートボタンに赤、グレー、赤点、色なしなど種類があり、ボディ貼り皮にも本革(緑、青、茶、赤)と合成皮革(淡茶、オリーブグリーン、ボルドー)があるなど、東ドイツ製としては例外的に多彩なタイプを誇っていた。

Altix III 1949年 (写真5)

レンズをROW Tagonar 3.5/3.5cmとし、シャッターも1/25, 1/50, 1/100秒と3速の自社製(?)とした以外、II型と同様。要するに廉価版としたものか。一方でTessar 3.5/37.5mmレンズ付きでCludorシャッター、シンクロも付けた高級ヴァージョンも出している。

Altix IIIa 1952年 (写真6)

フォーマットを24×36mmに変更、スクリューマウントでレンズ交換可能とした。フォーマットを広げた分、標準レンズの焦点距離を50mmにする。本機にはLudwig Meritar 2.9/50mmが付けれられているが、交換レンズは見つからないという。シンクロ接点付きになる。レンズ前板上部に四角囲みゴシック体文字でALTIX。

Altix IIIaのバック (写真7)

ボディの構造を変えずにフォーマットを24×36mmに変更したことを示す。

Altix IV (前期型)1952年 (写真8)

シャッターに1~1/200秒のCludorまたは1~1/250秒のVeburを採用したため鏡胴が太い独特の形態となった。レンズはTrioplan 2.9/50mmとTessar 3.5/50mmの2種類を固着している。ファインダー接眼部は円形。シンクロ接点付き。底蓋ロックを大きくし、安全確実な方式に変更。アクセサリシューを初めて採用。ノブが前期型でレンズ前板に四角囲みゴシック体文字で"ALTIX"と刻印したものを前期型とする。

Altix IV (後期型) (写真9)

レンズ前板上部に筆記体文字で"altix"の刻印に変更したものを後期型とする。後期型ではファインダー接眼部を角型にし、ノブをやや大型化して巻戻しノブ上部にフィルムインジケーターを付け、ローレットの部分に3本溝とした。この型からフィルムフレーム枠にBody No.が入る。このタイプはよほど評判がよかったものか、Classic 35と名を変えた対米輸出専用機がつくられ、IV型自体はV型が出た後も作られ続けたという。

Altix I ~ V型を並べて比較する(写真12)

I型からV型までを右から左へ接するようにならべて斜め上から眺めたのがこの写真である。レンズ部分を除けば、I型でシャッターレリーズボタンが違うことのはほとんど同じであることがわかるであろう。きわめて効率的な製造がおこなわれたようである。



写真11 Altix V 1954年



写真10 Classic 35



写真12 Altix I ~ V型を並べて比較する



写真13 Altix-n (前期型) 1958年

Altix-n (前期型)1958年:(写真13)  
発売以来はじめての大幅なデザイン変更が行われ、Altix-nとして発売された。“n”はドイツ語の“neu”すなわち“新”を意味する。スピゴット・マウントのレンズ交換方式はそのままに、ボディの形状を完全に変更した。すなわち、ボディ上面を完全にフラットにし、大型のファインダーを組み込んだモダンなデザインを取り入れたのである。フィルム巻き上げはレバーwindを採用し、裏蓋はコンタックス式に完全に取り外せる。レンズの取り付け部には逆三角形のエプロンを付けたので、コダックのレチネッテ I Aに外観が似ることになり、それまでの東側カメラの個性がなくなってしまった。シャッターは1~1/250秒のTempor



写真14 Altix-nb (前期型)1958年

に変更されたが、標準レンズはV型に同じ。カメラ名は上部に筆記体で刻印されている。フィルム巻戻レバー上にフィルムインジケーターが付く。

Altix-nb (前期型)1958年 (写真14)  
n型の上部に非連動の電気露出計を重ねて載せただけのものである。“b”は露出計のドイツ語のBelichtungsmesserからとったものである。露出計以外はn型と同様。露出計蓋に“altix-nb”の記載。

Altix-n (後期型) 1959年 (写真15)  
n型で大型化されたファインダーをさらにブライトフレームとした。そのための明り取り窓を



写真15 Altix-n (後期型) 1959年

フィルム巻戻レバーの脇につけたため、ノブは小さくされた。フィルム巻き上げレバーが長くされた。

Altix-nb (後期型)1959年 (写真16)  
n型の軍艦部に電気露出計を組み入れたもの。フィルムインジケーターは省略された。逆三角形のエプロンの形をわずかに変更。露出計蓋に筆記体で“altix-nb”の記載があるものとないものがある。

“Yugo” Altix IV1961年 (写真17)  
1961年末から旧ユーゴスラヴィアのサラエヴォでAltix IVがライセンス生産された。機体はIV型後期型そのものであり、ドイツ製との相違点はボディ後部の上げ蓋にドイツ製では“Altissa”銘がエンボスされているところ、ユーゴ製ではこの写真に示すようにこれを製造したズラーク社のマークと名前“SARAJEVO”および“MADE IN YUGOSLAVIA”がエンボスされていることである。ボディNo. もここだけのものが入れられたようである。

(完)



写真16 Altix-nb (後期型)1959年



写真17 Yugo Altix IV1961年